

追悼 ヤン・ヴァン・ブラフト

(一九二八〜二〇〇七)

J・W・ハイジック
James W. HEISIG

2007年4月12日、復活節の第一木曜日の早朝、ヤン・ヴァン・ブラフトが78歳で静かに息を引き取った。前年の年末に健康が悪化しはじめ、京都の住まいを引き払い、姫路の淳心会（CICM）レジデンスに居を構えなければならなくなった。2月21日、肺ガンで入院し、何週間後に手術が施された。半ば昏睡状態になってから意識を回復したが、再び口をきくことはなかった。

ヴァン・ブラフトは、ベルギー・フランドル地方のシント・アントニウス・ブレヒト市で生まれ、淳心会（1862年にベルギーで主に中国宣教のために設立されたカトリック修道会、通称スクート会）に入会した。6年後の1952年に司祭に叙階された。哲学で修士号を取得してから、博士課程に入学すると同時に淳心会の神学院で哲学を講じた。

5年後、ヘーゲルに関する論文で博士号をルーヴァン大学から授与され、すぐに日本に向けて出港し、1961年12月に日本の地を踏みしめた。ヴァン・ブラフトは、18ヶ月間厳しい日本語の訓練を受けてから大阪に近いカトリック堺教会の助祭となり、さらに18ヶ月を過ごした。1965年の春、彼は京都大学に研究生として受け入れられ、その後、6年間、武内義範と西谷啓治に師事した。1971年、彼は、淳心会日本管区の長に指名され、5年間その職にあったが、はからずも新たに設立された南山宗教文化研究所所長に招聘され、その任を離れた。

次の15年間、彼は、駆け出しの研究所を成熟させ、日本における諸宗教対話というその大半が海図のない未知の水域を探索することに専念する学者の共同体に若く未経験のスタッフを駆り立てた。彼の最初のプロジェクトの一つは、修道者相互の交流であり、主導的な仏僧や尼僧を日本からヨー

ロッパの修道院に連れて行くとともに、その逆に、ヨーロッパの修道者を日本の僧院に連れてきたのであった。日本で行われた締めくくりのシンポジウムで、彼は議長を務め、日本語、フラマン語、ドイツ語、フランス語、英語を、いつもながらさりげなくたくみにあやつった。彼は、関連書籍をあわただしく出版した後で、そのプロジェクトを他の人々に委ね、それは今日まで続き、その大半が、彼が当初果たした役割をもはや知らない第二世代にまで到達したのだった。

ヴァン・ブラフトは、1982年に設立された東西宗教交流学会においても主要な人物であった。学会の事務局を研究所にもたらしただけではなく、1989年から1997年まで会長を務めた。彼が南山宗教文化研究所にいた時代には日本中で対話の講師やパートナーとして求められた。彼は長年、同じ役割で世界中を旅して、比較的長い期間、カナダ、ベルギー、アメリカ合衆国、フィリピンに招聘された。1985年から1990年まで教皇庁諸宗教対話評議会の評議員を務めた。彼は、思考や著作、研究や読書、さらには道義的関心において、多くの文明、歴史、文学、文化を逍遙した。しかしながら、結局のところ、彼がもっともくつろいだ気持ちになったのは日本であり、そこにこそ、人生の物事を一つの世界観に紡ぐ機織りを見いだしたのだった。

同僚のフラマン人宣教師であり南山宗教文化研究所で長年の同僚であったヤン・スイングドーは彼の葬儀の際に、いつも名誉や賞賛から身をかまし、他の人々を彼の肩の上に立たせ、本来彼の業績を他の人々に譲りさえたヴァン・ブラフトに対して、思慮深く感動的な賛辞を捧げた。彼は、ヴァン・ブラフトの蔵書（そのうちの哲学

関係のものは大阪のアジア研究センター Centro Studi Asiatico に寄贈された）を俯瞰して、神秘主義に関する書籍の多さに感銘を受けたという。

われわれみなと同じように、スイングドーは、ヴァン・ブラフトが諸宗教の架け橋としてキリスト教神秘主義に関心を抱いていたことを知っていた。しかし、行間に書かれたメモ書きを見て、われわれの大半が決して気がつかなかったことを悟ったのだった。それは、ヴァン・ブラフト自身の霊性がいかに深く神秘的伝統に根ざしていたのか、そして、そこにこそ彼が司祭として、教育者として、学者としての理想を基礎づけていたということなのであった。彼が送った簡素な生活や彼が培った素朴な嗜好は、さらに要求してさらに消費するという時代の仮借のない圧力に抵抗する対処法であった。それらはまた、われわれの人生の重要なインスピレーションが——諸宗教の対話へのインスピレーションのように——思いのまま吹かれる必要があり、制度化や専門家による強制執行から護られなければならないという彼の深い信念のしるしでもあった。

私はヴァン・ブラフトと18年間、パウルスハイムで生活した。そこは学者の共同体の住まいであり、南山宗教文化研究所に滞在するために世界中から訪ねてきた何百人もの男女に宿を提供するものであった。私が机の上に載っている彼の写真を見ると、押し寄せてくる多くの思い出の中でも、それらの大半は、ハイムで行った議論と関係があるのだった。われわれはいったい幾晩、ハイムの居間で、海外の訪問者と東西宗教交流学会の宗教や哲学について議論したことだろうか——フリッツ・ブリ、ハンス・キュング、ライムンド・パニッカー、フ

レデリック・コプルストン、イヴァン・イリッチ、アーネスト・カルデナル、ジャン・ソブリノ、グスタボ・グティエレス、ブライアン・ウィルソン、ハインリッヒ・ロンバッハ、ウィリアム・セオドア・デバリー、ジュリア・チン、スラク・シバラクサ、フレデリック・フランクだけでなく、日本国内からひっきりなしに来た学者たちと。

訪問者が若い大学院生であろうと、世界的に著名な学者であろうと、ヴァン・ブラフト師は、だれもが心地よく感じるようにするすべを心得ていて、会話の中心があるひとからまたあるひとに優雅に移っていくようにしてくれた。私はいつも彼は対話の魂だと思ふやいた。そのことはとりもなおさず、私が文字通り「魂」という言葉の使い方を知っているということなのである。物静かに、そして、劇的なものを感じさせず、多くの場合、ユーモアたっぷりだが、彼自身の存在を感じさせることなく、彼は、議論を呼吸させつづけるすべを心得ていた。

彼がどんな人物であったのかを象徴する記憶として二つのものが際立っている。日本に到着した日、私はまっすぐに研究所に向かった。私は建築家のスケッチ以外、それを眼にしたことがなかった。ヤンは、私に来るのを知って玄関先で待ちうけてくれた。彼は手を伸ばし、自己紹介をして私を歓迎した。私が礼儀正しい握手の後で引き下がると、彼はもう一方の手で私の肩をつかんだ。「ジム、本が詰まった二つのトランクがついたので、君の研究室に入れておいたよ。必要なものを取り出して建物をよく見てごらん。まだ少人数しかいないのでほとんどの部屋はまだ空いているが、よく見るんだ。君が日本語を読み書きして自由に議論できるようになるまで、これらの扉を出入りするのはこれが最後だ。そのときま

で、私たちは君抜きでうまくやっていくからね」。そして、それから彼はほほえんで私を研究所の中に入れた。当時、私は彼の言葉が温かいが奇妙だと思ったのを覚えている。

彼のふるまいがいかに寛大であったかということを知ったのは、彼から与えられた課題を果たして研究所に戻ってきたときであった。骨格となるスタッフは、経験もなく新たな研究所をはじめたばかりだったので過労気味であり、指針となるものもなく方向を喪失していたが、さまざまな宗教の人々が互いに学術的に話し合うオアシスを作るという漠然とした理想を持っていた。事務室を組織したり文献資料を収集したり奨学金を手配したり宗教的指導者や学問的指導者と相談したりするためになされなければならなかった仕事の量は膨大であった。そして、そのような状況にあって、彼は、私が心配しなければならないのは可能なきり十分な準備をすることだと言ってくれたのである。予定もなければ締め切りもなければプレッシャーもなかった。

このことは、研究所をそのメンバーのニーズに合わせることのできるすぐれたセンターにするためには、組織の関心がいつも二の次であることを彼が保証した多くの機会の最初でしかなかった。われわれが、時とともにこれらの理想にしたがって行動するのに失敗したときにはいつでも、ヴァン・ブラフト師は、われわれが忘れたときには思い起こさせ、われわれがつまずいたときには手をさしのべ、われわれの気が散ったときにはもとの道筋に立ち返らせた。たとえ過大な賛辞が弔辞につきものといっても、これらのことはあまりにほめすぎと思われるかもしれない。しかしながら、それは決して過言ではないのである。なぜなら、彼

がここにいるかぎり、ここに帰ってくるたびに、ヴァン・ブラフトが南山宗教文化研究所のからだと魂であり、その最善のものであることに疑いがなかったからである。

私はまたヴァン・ブラフトが私の師であったという強烈な経験を覚えている。彼が同僚と相談したり西谷自身と何時間にもわたって議論したりしながら16年の月日を費やして、西谷啓治の名著『宗教とは何か』[英訳 *Religion and Nothingness*] を訳し終えたとき、ヴァン・ブラフト師は、その原稿にはもう一つ加えるべきものがあると感じた。それは、母国語としての英語の感触だった。彼が私の助けを求めて、可能なかぎり不自然さを取り除いて散文に一定の流れをもたらすように求めたとき、私は誇りを感じた。私は日中、日本語の文献を前にして仕事をして、自分が完璧な仕事であると思ったものを生み出すために数ページの英訳文を書いたものだった。

それから夜には、夕食の食卓を片付けて夕方のニュースを見てから、彼は、私といっしょに席に着き、私の訳業を一語一語検討して、私がそれほどまでに慎重に織り合わせた糸を一本一本ほぐしていった。何ヶ月もの間、私は、私が可能なかぎり想像した以上に信頼の置ける翻訳の学問的な良心についてさらに学んだのだった。重荷を軽くしてくれるコンピューターはまだ存在していなかった。私が正しく翻訳したと彼が満足するまで、何度も何度もページのタイプを繰り返さなければならなかった。彼は数時間ごとに私が正しく訳した句の変わり目を見いだしては興奮したのだった。それ以外の時には疑念と疑問に満たされていた。それが終わったときには、私は決してそれが自分の仕事だとは少しも思わなかった。しかし、私は、彼が私を利用したとも感じ

なかった。彼が彼自身に課した要求を満足するために、彼が私のいかなる師よりも私自身に要求することを私に教えたのは、師としての天分であった。

ヴァン・ブラフト師は、南山大学で定年を迎えたとき、さらに2年間、名誉教授として研究所で過ごしてから死ぬ数ヶ月前まで過ごした京都の北の端の小さな部屋に越していった。京都大学で過ごした頃から京都は彼の心に特別な場所を占めていた。研究所の予定が空いたとき、また、論文の締め切りがあってすべてから逃げ出す必要があるとき、彼は、夕食の時に「しばらく消えるからね」といったものだった。われわれはみな、彼が京都に向かい、笑顔を浮かべてカバンには完成原稿を携えて二、三日したら戻ってくることを承知していた。

引退して京都に引っ越した後でさえ、彼は、何ヶ月かおきに研究所に戻ってきて、研究誌などを閲覧したり接触を新たにしたりした。これらの訪問は、われわれも楽しみにしていたし、私が知るかぎり彼もまたそうだった。2006年になって、南山宗教文化研究所に設立した新たな諸宗教研究講座の客員教授として研究所に一年間戻ってくる可能性について、われわれは彼と議論しはじめた。この申し出は、彼の健康が急激に悪化していった時期と重なっていて、彼は、涙をこらえながら、その地位を占める力があるとは思われないと私に告白した。

彼の学術的な貢献や彼自身の思想の展開は、この短い覚え書きよりも注意を要する事柄である。私は、東西宗教交流学会の2007年次大会のために特別講演を準備している。そこで、さらにくわしく述べるとともに彼の主要な著作のリストを用意するつもりである。一応最後に、私は自分が決して書く必要がないと期待していた言葉を書

くばかりである。さようなら、ヤン。あなたは、よき師であり、さらによき友人でした。あなたのいない世界は一回り狭くなりました。

ジェームズ・ハイジック
本研究所第一種研究所員